

食料基地北海道



北海道内の農水産物の輸出が、この5年間で2倍の約700億円に増加し、その8割を港湾から輸出しています。

釧路港の背後圏、東北海道は、国内有数の酪農地帯であり重要な食料供給基地です。釧路港は、2016年、全国で初めて「穀物」の特定貨物輸入港湾に選定されました。バルク貨物とは、梱包（こんぼう）せず船に直接積み込む貨物で、私たちの生活に欠かせない資源や食料のほとんどがバルク貨物になります。穀物、鉄鉱石、石炭を三大バルクと呼んでいます。

日本の主要な穀物輸入港湾の多くは水深13mより浅く、穀物輸送の主力船型であるパナマックス船（パナマ運河を通行可能な国際的な船の規格）の満載での入港が不可能な状態となっています。さらに、2016年のパナマ運河の拡張により、通航船舶がますます大型化し、世界的に輸送の効率化が図られているところです。

ここ釧路港は、国際バルク戦略港湾（穀物）の選定を受け、北海道・東北地方等の穀物輸入の拠点として、パナマックス船による満載輸送に対応した係留施設整備が進められています。大型船による一括大量輸送により、海上輸送コストを削減するなど、この西港区第2ふ頭にも大きな役割が期待されています。

を支える物流拠点 釧路港

国際競争力を高める水深14m岸壁の整備が進む



表紙：釧路港西港区第2ふ頭、水深14m岸壁工事（撮影：2017年9月20日）。
本工事は2018年3月に竣工し、その後、荷役機械などの建設が行われ、供用開始は、2018年秋ころの予定。背景に見える赤と白の煙突は、日本製紙（株）釧路工場

目次：水産・石炭・紙パルプの基幹産業とともに発展してきた釧路港について熱心に学ぶ、早稲田大学社会学コース嶋崎ゼミの皆さん。手前は資料館で説明をする釧路港湾事務所山口圭太係長（2017年9月20日）

裏表紙：穀物を主に取り扱う釧路港西港区。手前が建設進む水深14m岸壁（2018年1月19日撮影、写真提供：白崎建設（株））